

正保二年與力知五百石を加へられ、合はせて四千五百石と成りたり。此の子與左衛門の時、秀治の家老堀丹後の家老深美縫殿を寛文元年松雲公六千石に抱えられ、人持組と成り、堀與左衛門の上列に置かる。故に與左衛門深美の下列に居るを耻ぢ、寛文三年祿を辭して退去す。是深美は堀家の陪臣たればなり。依つて堀主馬が家も秀治の子孫なるがゆゑに、人持組へ加へらるゝ時、千石なれども深美より上列に置かせらるべきとの事、松雲公夜話録の追加に見ゆとあり。平次按ずるに、堀與左衛門退去の事は、菅家見聞集寛文三年の條に、今年堀二代與左衛門御暇申上、弟二人召具し他國へ出奔す。其宅を篠原二代織部に被下。今の主水家は也。織部初めの家は不明門の内女中小屋を被作。今井屋敷是也とあり。又利常卿小松城に居給ふ頃、人持組堀與左衛門と山本瀬兵衛とに命ぜられ、鶴來より金澤までの道作り方を仰付られたるよし、山木基庸の夜話録に見ゆ、また堀與左衛門は堀秀治の孫なりし故、利常卿より賜はり物ありても悦べる色なし。さすが大名の子孫なるゆゑなりと利常卿の御噂ありたるよし。是も夜話録に記載す。

○十間町

此の町名は、寛永十五年の耶蘇宗改の高札請書に、十間町太郎兵衛と載せられたれば、寛永以前よりの町名なる事知られけり。十間町は十軒の義也。十三間町・十九間町など、同じく、その初戸數十軒を建築して町立せし故に町名とすといへり。町幅十間なる故に稱するかといへる説は非なり。又金城深秘録に、十間町の町家の軒下を柱立に致し有之は、出陣の時爰に馬共を繋ぎ、兵糧を付け出す所なる故也と云ふとあり。

○多々良宗右衛門舊邸

十間町南側中程なり。舊藩中金澤家柄町人の一人、屋號を本吉屋と呼べり。國初以來十間町に居住し、代々宗右衛門と稱す。又彌右衛門ともいへり。寛永十四年閏三月金澤家柄町人共へ木斛拜領被命に付き、御請書の連名中にも、本吉屋宗右衛門と見え、十二冊定書に載せたる元祿十四年金澤町人屋敷拜領等の人々取調書に、本吉屋彌右衛門銀座就被仰付、天和三年より夜番亭主番・立番御赦免、町中より餘荷とあり。八代目宗右衛門は風雅人にて、殊に詩文に長

ぜり。墓誌に云ふ。君諱弼、字夢鶴、稱宗右衛門。號西臯。以天明二年壬寅二月十六日生於金澤城十間坊。自始祖至君八世、家稱本吉屋。以文政戊子初。被允稱本姓多々良。蓋特恩也。文化五年七月擢爲金澤府町年寄。賜日俸三口。天保二年十二月加賜五口。九年戊戌二月廿七日己巳以病卒。享年五十七歲。諡曰補山宗弼居士。以三月朔葬于金澤城南大乘禪寺先塋之次。とあり。その作詩秀逸多しといへども、左の一詩載之。

集陶淵明歸去來辭中之字、賦間適。

遠壑引泉入松徑。南窓消日話田園。時尋光景携僮僕。或得良辰設酒樽。知命游觀何可倦。關心榮貴不常存。舒懷聊寄琴書樂。雲去鳥歸向我門。

植杖松園路。泉流自怡顏。賦詩酒任酌。交世心何關。雲就行休景。鳥知來往安。光榮非我事。與盡農人歡。

金陵韓夢鶴道人

右子孫惣作、明治八年十月家を賣却して退去す。

○米商會所跡

俗に中買座と呼べり。是も十間町南側入口なり。舊藩中は

金澤町奉行の支配にて、町役人中買肝煎して惣轄せしめ、加越能三州の米價を日々取究め、藩公の拂米及び藩士の知行米を賣却す。中にも七月・十月の兩季は、諸士の知行米を賣却する古例なりし故、加越能の諸郡より拂米を買求めに出づ。此の取次する米商人をば中買と稱し、口錢を取つて賣渡せり。故に中買座と呼べり。享保録に、正徳六年の話に今五ヶ年許以前までは米中買金澤町中に漸二三人外は無之處、別而中買多に成ると見え、町會所横目方諸事留帳に、享保六年六月廿八日米中買惣人數高調方被仰渡、則取調候處、百九十五人有之、此段申上とあり。按ずるに、米價の高下は穀作の豊凶に據りてなりといへども、貨幣の品位にもよれり。小倉日記に、享保五年七月廿日頃米石代銀二百三拾目位、翌十六年十二月丁銀にて石代二百五十目位とあり。右兩年は加越能三州非常の飢饉なりしかど、國初以來の高價といふべし。又寶曆五年加越能三州の諸郡郷初めて銀鈔通用の事と成りけるに、此の時非常に動搖して米價甚だしきに至れり。越路鏡に、去年銀札遣に成りし後は、米穀追々高直、一石價銀札三百五拾目と見え、加藤蘭山私